

⑤2 竹樹追悼摺

無常観想

黄昏る、旅や四五丁梅明り

竹樹居士

眼に立や雪間につみし海苔の色

初花やあたりに見えぬさくらの木

七草や手向の数にひとまとめ

香をしたふ道のしをりやこほれ梅

淡雪に仰山らしき焚火かな

花は七日人七とせの忌日かな

香か清き梅をこころの手向かな

雨も春雪も春なりうめの花

ふりつゝ小雨や春を惜むほと

うるはしきふところ見なる柳かな

さゆるのもけしきほと也梅の花

佐保姫や見ぬ佐保山の眼にうかふ

各詞書あり略す

七とせの春や磐城の竹の秋

墨の香をしたふか蝶も机先

杯とゝもにゆつるや花むしろ

黄鳥も終日のかす法の庭

梅しろし七とせ前をしのふ日に

言の葉の便りも寒し別れ霜

魁の健気や梅に立日数

巢こほれの鼠這散る余寒かな

明る夜の海よりはやし山さくら

うくひすや初手ひと朝は来たはかり

桃さくや干鯛をこなす杵の音

精進の鱸に散るや夜の花

夜の明て朧はなれし柳かな

花の香や木の間をすける菊造り

花鳥もよそくしさや竹の秋

かたよりて春また寒し池の鳥

田を前にぬくき小村やもゝの花

草餅やもてなしふりの山折敷

うつすりと紅はく空やはつ日の出

寒さをもいとふ色なし富貴のたう

潮の引なりに広がるかすみかな  
行春や山へ帰るは山の鳥

我家の春は夜にあり梅に月

鍵番の袴つけゝり蔵ひらき

居馴染た田をよそくし帰る雁

ぬるゝとはよき気先なり水祝

東風ふくや干潟にのこる汐の泡

箸紙にふたつさしけり小殿原

野に山に春は満たり百千鳥

鶯の遠音締るや夕間くれ

筆置て盃とるや花むしろ

花と雲二手に別るいふへかな

淀む瀬やのとか尽してうく鴨

湖にさへ浅瀬はありて蜆とり

鶴もまたしらぬ雪間の若菜かな

綱引や勝ほこりたるちからあし

菜の花や近くて遠き道祖神

祝ひほど摘て買足す若菜かな

佐保姫や野は寒からぬ雨のあと

散るはみな水のうへなり松の花

野の風のやはらきて咲すみれかな

水はなれした声てなし初蛙

ゆく春や松にさはらぬ海の音

梅か香を摺込日ありとろゝしる

神寂た石坂長し松のはな

水垢にすへる岩根や藤の花

鶯や茶の木かくれに家ひとつ

売あまるほとは荷はす若菜売

此雨にこの夕暮や花明り

近くともうらからは来ぬ御慶かな

また寒き春なれと此月と梅

黄鳥の初音氷をはしりけり

島人に生海苔もらふ日和かな

風にそれ日にそれ揚る雲雀哉

陽炎にむかうてこほすなみたかな

散て後人に訪るゝさくらかな

菜の花やからまる蝶をよけて飛

したはしや奥ある花の散しかと

洞霜

張遂

青山

八十八

龜遊

猿舞

丹前

埴我

直齋

白鼠

菊子

柏の本

松蔭

千尋

一山

雛鶴

あや女

朝間

告志

妓裙

南花

看雲

千葉

松翠

十四女

清齋

竹秀

新月

竹世

松楼

花川

柳湖

琴松

静霞

雀野

菊壽

風音

賞湖